



土偶が出土した竪穴住居1跡 4つの竪穴住居が連なって出土 奥より竪穴住居2→5跡 土器棺墓

# 最古級 ふくよか土偶

滋賀県文化財保護協会は29日、同県東近江市永源寺相谷町の集落遺跡・相谷熊原遺跡から縄文時代草創期（約1万3千年前）の国内最古級の土偶1体が出土したと発表した。三重県で1996年に見つかった土偶とほぼ同時代のもの。ともに女性像で、今回の土偶のほうが指先サイズと小型だが、乳房や腰のくびれが優美に表現されている。信仰や祭祀に使われたとみられ、旧石器時代からの転換期の縄文人の精神文化の芽生えを考えるうえで貴重な発見という。

（加藤藍子） 35面に関係記事

## 縄文草創期 指先大

滋賀・相谷熊原遺跡

土偶は高さ3・1センチ、最大幅2・7センチ、重さ14・6グラム。胴体部分だけを表現した。底



を平たく仕上げ、自立できる造りは縄文中期（約5千年前）以前の土偶では例がないという。

三重県松阪市の粥見井尻遺跡から出土した同時代の土偶（全長6・8センチ、最大幅4・2センチ）が逆三角形に近い形状なのに対して、今回の土偶は豊満な体形。京都大学の泉拓良教授（考古学）は「パ

ランスがいい。女性らしさの表現は、多産や豊穡の願いを託したのでは」とみる。

土偶は今回出土した5棟の半地下式の堅穴建物群のうち、1棟を覆っていた土から見つかった。この棟から縄文草創期の特徴を持つ爪形文土器や矢柄研磨器（砥石）が出土。土器に付着した炭化物を放射性炭素年代測定法により

鑑定した結果などから、土偶も約1万3千年前のものとみられた。

堅穴建物跡は直径約8センチ、深さ約1メートルの棟もあり、国内各地で出土した同時代の一般的な堅穴建物跡（直径4〜5センチ、深さ30〜40センチ）に比べて規模が大きい。多大な労力をさいて建てられたとみられ、定住用の建物の可能性があ

る。県文化財保護協会の松室孝樹主任は「縄文人の定住化への過程と、土偶のルーツの関係を探る鍵になる発見だ」と話す。

現地説明会は6月6日午前10時と午後1時半からの2回。雨天決行。問い合わせは同協会（077・548・9780）へ。



相谷熊原遺跡で出土した土偶＝26日、滋賀県東近江市、竹花徹朗撮影

# 安定願った 豊満な体

## 最古級土偶 専門家「定住へ意識」



**三重** 三重県の粥見井尻遺跡で1996年に出土した土偶＝三重県埋蔵文化財センター提供



**滋賀** 相谷熊原遺跡で出土した土偶＝26日、滋賀県東近江市、竹花徹朗撮影

なだらかな肩のライン、胸の豊かな膨らみ、腰のくびれ……。滋賀県東近江市の相谷熊原遺跡から出土した縄文時代草創期の国内最古級の土偶は高さ約3センチと小さいながら、女性の特徴が強調されていた。「子孫繁栄」「食生活の安定」への願いの表れなのか。約1万3千年前に土偶をつくった縄文人に、専門家は思いをはせた。――11面参照

同時代の土偶は、約60センチ南にある三重県松阪市の粥見井尻遺跡から出土しているが、形状が全く異なる。南山大学の大家達朗教授（考古学）は「今回見つかった土偶は豊満、立体的、リアルな造形で、ひと目で女性とわかる。粥見井尻遺跡の土偶とは制作意図が明らかに違う。安置して常に大切にするという意味が込められているのだろう」と指摘する。

縄文時代に詳しい国立民族学博物館の小山修三・名誉教授は、欧州の旧石器時代のピナス像と同様、乳房が強調されていることに注目。「当時の豊饒さのシンボルが女性の胸にあったということだろう。縄文中期の土偶が、腹部や臀部を強調した妊婦型なのは対照的だ。小型なのはお守りのように持ち歩くためでは」とみる。

その制作意図について、国学院大学の谷口康浩准教授（先史考古学）は「定住化による共同体意識の高まりの中で、『食生活の安定』『命の継承』に対するより強い願いが生まれたことの表れ」と推測。移動生活を繰り返していた旧石器時代に土偶は存在しておらず、世界観が完全に変わったことを示しているともみる。

土偶が見つかった堅穴建物跡にも専門家は注目する。相谷熊原遺跡は三重県境の鈴鹿山脈を源流とする愛知川南の河岸段丘にある。山間部に開けた平地で5棟の跡が確認された。

京都大大学院の泉拓良教授（考古学）は大規模な遺構と最古級土偶の関連について、「土偶に人々が託したとされる豊穣や子孫繁栄の願いは、共同体意識があつて初めて生まれる。土地に根ざして生きるという覚悟が、この土偶を生んだのかも知れない」と語る。

奈良大学の水野正好・名誉教授（考古学）も「人々が定住していたといえる住居が多数ある集落の発見は意義が大きい」と指摘する。

**縄文時代草創期**  
日本列島で人類の生活が始まったとみられる後期旧石器時代に続く時代。約1万5千年前から約1万1千年前とされる。最終氷期が終わり気候は暖かくなり、人々は狩猟や漁労、木の実の採集などで生活の糧を得ていた。矢柄研磨器など新しい石器や土器が数多く出現したのが特徴。旧石器時代の人々は移動生活を繰り返していたが、縄文草創期に堅穴建物が造られ始めたこととみられることから、この時代に定住化が進んだとする研究者もいる。

## まさに“縄文のビーナス” 最古級の土偶発見

### 東近江・相谷熊原遺跡

ふっくらした胸に、わずかにくびれた腰。

滋賀県東近江市永源寺相谷町の相谷熊原遺跡で見つかった土偶は、豊満な女性をリアルに表現した1万3千年前の“縄文のビーナス”だった。子孫繁栄や安産のシンボルといわれる土偶。スタンプほどの大きさしかない超ミニサイズの人形に、古代人たちの深い祈りが込められていた。

今回の土偶は頭部が表現されておらず、首の部分に1ミリ大の穴が空けられていた。調査担当の県文化財保護協会によると、現代のひな人形のように頭部を棒状の芯ではめ込むタイプではなく、穴を空けることで頭部そのものを表現した可能性があるという。

縄文時代初めに誕生した当初の土偶は、頭部がなく胴体だけで表現されているものが一般的だ。今回の出土品は乳房が強調されていたことから、子孫繁栄を願うシンボルだったとみられる。

顔が明確に表現されるのは、縄文中期(約5千年前)になってからという。

縄文文化に詳しい渡邊昌宏・大阪府教委参事は「とても小さい土偶で、女性がお守りとして肌身離さず大切に持っていたのではないかと推測。「女性が『乳がたくさん出ますように』と祈りをこめたのかもしれない」と、縄文人の心情に思いをはせる。

縄文初期の日本列島は、氷河期の終焉とともに海水面が次第に上昇し、それまで中国大陸と陸続きだったのが現在の姿になったころとされる。一方、地質学者らの研究によると、今回の土偶や竪穴住居跡が見つかった約1万3千年前は、地球規模で再び一時的に寒冷化し、現在より平均気温が10度以上も低かったとの説がある。

京都大大学院の泉拓良教授(考古学)は、こうした気候変動に着目。

「急激な寒冷化によって、縄文人は寒さをしのぐため、深さが1メートルもある半地下式の竪穴住居を築くようになった」とし、「深くて大きな竪穴住居を築くには、集団で作業をしなければならず、人が集まることで新たな文化が芽生え、土偶が生み出されたのではないかと推測する。

深さ1メートルを超える竪穴住居は、世界的にもシリアで出土した約1万2千年前が最古級とされ、泉教授は「今回の住居跡は、国内どころか世界的にも極めて古い」と指摘した。



#### 【写真説明】

土偶が見つかった相谷熊原遺跡。  
国内最古級の大型竪穴住居跡も確認された  
＝滋賀県東近江市(塚本健一撮影)

**土偶** 粘土で女性をかたどった素焼きの人形で、縄文時代初めに出現。北海道から九州にかけて約1万5千点が出土しているが、弥生時代になると突然姿を消す。歴史教科書などで紹介される派手な装飾や大きな眼鏡をかけたような土偶は東北地方に多く、大半は縄文時代後期や晩期(約3千～4千年前)に作られたとみられる。

## 縄文初期の最古級土偶、 竪穴住居跡出土 滋賀・相谷熊原遺跡

滋賀県東近江市永源寺相谷（あいだに）町の相谷熊原遺跡で、縄文時代初め（約1万3千年前）の土偶と大型竪穴住居跡が見つかり、県文化財保護協会が29日発表した。いずれも国内最古級で、縄文人の生活や文化を知る上で貴重な資料になるとともに、従来は東日本が中心とされてきた縄文文化が近畿でいち早く誕生した可能性も出てきた。

土偶は高さ3センチ、重さ15グラムと極めて小さく、竪穴住居跡から完全な状態で見つかった。頭部はなかったが、乳房が表現されていることから女性の上半身とみられ、子孫繁栄を願う象徴だったと推測されている。これまで最古とされていた土偶は、約60キロ南にある三重県松阪市の粥見（かゆみ）井尻遺跡の2点で、今回とほぼ同時期という。

竪穴住居跡は5棟分が見つかり、うち2棟分は直径約8メートル、深さ1メートル近く。この時期の竪穴住居跡は全国で50～100例見つかっているが、大半は直径3～5メートルで、異例の大きさだった。大型住居を建てるには多くの労働力が必要なことから、この地域の縄文人が集団で生活し、住居を築いた可能性もあるという。

現地説明会は6月6日午前10時と午後1時半。近江鉄道バス・永源寺車庫下車。

谷口康浩・國學院大准教授（先史考古学）の話「縄文文化は東日本中心という説が有力だったが、近畿や東海を中心に早い段階から芽生えていたのではないかと。この時期は竪穴住居跡の発見例が少なく、定住はなかったとの見方が強かったが、今回の発見で定住化が進展していたことがうかがえる」



相谷熊原遺跡から出土した国内最古級の縄文時代の竪穴住居跡  
26日午後、滋賀県東近江市永源寺相谷町（塚本健一撮影）



土偶が出土した竪穴建物跡  
滋賀県東近江市（滋賀県文化財保護協会提供）



滋賀県東近江市永源寺相谷町の相谷熊原遺跡で、  
出土した国内最古級の女性をかたどったとみられる土偶

## 土偶：国内最古級 1 体出土 滋賀の相谷熊原遺跡で

2010年5月29日 17時31分 更新：5月29日 19時8分

滋賀県文化財保護協会は29日、同県東近江市永源寺相谷町の相谷熊原（あいだにくまはら）遺跡で、縄文時代草創期（約1万3000年前）の竪穴住居跡5棟が見つかり、国内最古級の土偶1体が完全な形で出土したと発表した。同時期の住居群跡は全国で数例、土偶は三重県の粥見井尻（かゆみいじり）遺跡で2点しか発見されていない。移動生活から定住が始まった時期の暮らしや文化がうかがえる、貴重な発見となりそうだ。

発見された土偶は高さ3.1センチ、最大幅2.7センチ、重さ14.6グラム。女性の胴体のみを、胸や腰のくびれも優美に表現し、底は平らで自立するのが特徴だ。上部に直径3ミリ、深さ2センチの穴があり、棒で別の頭部をつないだなどの可能性もある。

相谷熊原遺跡は、三重県境の鈴鹿山脈から流れる愛知（えち）川の南の河岸段丘にあり、山間地と平野部が接する場所にある。竪穴住居群は、緩い斜面約100メートルの間に5棟連なって確認された。規模の分かるものは直径約8メートルのいびつな円形で、深さ約0.6～1メートルと、これまでの例より深く、しっかりした構造だった。作るのに相当な労力がかかる上、多くの土器や石器も出土しており、一定時期でも定住したことが考えられるという。

現地説明会は6月6日、午前10時と午後1時半の2回。雨天決行。問い合わせは県文化財保護協会（077・548・9780）。【南文枝】



縄文時代草創期の竪穴住居跡から発見された土偶  
滋賀県東近江市永源寺相谷町で、南文枝撮影